〈資料紹介〉

歌書ふたつ

——岡崎市　専福寺蔵書のうち——

渡邊信和

本稿は、当研究所が行なった岡崎市祐金町の専福寺蔵資料の調査によって発見された資料のうち、Ⅰ私撰集「三諦四九撰」の翻刻紹介と、Ⅱ注釈書「古今和歌集・伊勢物語難義注」の紹介である。この二点は共に、本来の専福寺蔵資料ではなく、近代に先住によって蒐集されたもののようであり、それ以前の来由は不明であるが、「伊勢物語難義注」を除いて未翻刻、未紹介の資料である。

Ⅰ　三諦四九撰

本文翻刻

三諦四九撰

俗

柿本大先　　業平中将

紀貫之　　壬生忠岑

道信中将　　実方中将

大宰権帥経信　　俊頼朝臣

後鳥羽院　　後京極摂政

前権中納言定家　　従二位家隆

僧

僧正遍昭　　素性　」2オ

増基　　恵慶

道命　　能因

良暹　　大僧正行尊

西行　　俊恵

寂蓮　　慈鎮大僧正

女

小野小町　　伊勢

齋宮女御　　中務

馬内侍　和泉式部
赤染衛門　紫式部　」2ウ
相模　大貳三位
五辻齋院　殷冨門院大輔

」3オ

柿本大先

1 梅か枝になきてうつろふ鶯のはねしろ
たへにあは雪そふる
（万葉 1840　新古今 30　読人しらず）

2 たつた川紅葉はなかる神なひのみむろ
の山に時雨ふるらし
（古今 284　読人不知　初句「あすか川」　拾遺 219）

3 さよ中と夜はふけぬらし雁かねのきこ
ゆる空に月わたるみゆ
（万葉 1701、古今 192）

4 たのめつゝこぬよあまたに成ぬれはま
たしとおもへと待にまされる
（拾遺 848　四句「またしと思そ」）

5 むはたまの夜わたる月をあはれとてわ
かおる袖に露そかゝれる

業平中将

6 すみわひぬ今はかきりの山さとにつま
木こるへきやともとめてん
（後撰 1084）

7 いへはえにいはねはむねにさはかれて
心ひとつになけく比かな
（新勅撰 637）

8 おもはすはありもすらめとことの葉の
おり〳〵ことにたのまるゝかな　」3ウ
（続後撰 852　四句「おりふしことに」）

9 月やあらぬ春や昔のはるならぬわか身
ひとつはもとの身にして
（古今 747）

10 たのまれぬうきよの中をなけきつゝ日
かけにおふる身をいかにせん
（後撰 1126）

紀　貫之

11 さくらはなさきにけらしなあしひきの
山のかひよりみゆる白雲
（古今 59　二句「さきにけらしも」）

12 草枕夕風さむく成にけりころもうつな
るやとやからまし
（新古今 905）

13 大かたのわか身ひとつのうきからにな
へての世をもうらみつるかな
（拾遺 953）

14 色ならはうつるはかりもそめてましお
もふ心をえやはみせける
（後撰 632、拾遺 623　五句「しる人のなき」）

15 ちはやふる神のたすけのゆふたすきか
けてや人のひとをこふらん
（続古今 1239　二句「神のたむけの」）

壬生忠岑

16 春たつといふはかりにや御芳野ゝ山も
かすすてけさはみゆらん　」4オ
（拾遺 1　四句「山もかすみて」）

17 ありあけのつれなくみえし別より暁はかりうき物はなし　（古今 625）

18 秋はきの下にかくれてなく鹿の涙や花の色をそむらん　（〔続千載 396〕〔今古和歌六帖〕）

19 ちとりなくさほの川きりたちぬへし山の木の葉も色かはりゆく　（古今 361　三句「たちぬらし」拾遺 186　三句同右）

20 大あらきのもりの下草しけりあひてふかくも夏の成にける哉　（拾遺 136）

道信中将

21 秋はつるさよふけかたの月みれは袖もの、こらす露そ置ける　（新古今 486）

22 槿をなにはかなしとおもひけん人をも花はさこそみるらめ　（拾遺 1283）

23 かきりあれはけふぬきすてつふち衣はてなき物は涙なりけり　（拾遺 1293）

24 さ夜ふけて風やふくらむ花の香のにほふ心地の空にするかな　（千載 23）

25 このよにはすもへきほとやつきぬらんよのつねならすものゝかなしき」4ウ　（千載 1091　二句「すむへきほとや」）

実方中将

26 中〳〵の物おもひそめてねぬるよはかなき夢もえやはみえける　（新古今 1158）

27 とゝまらんことは心にかなへともいかにかせまし秋のさそふを　（新古今 875）

28 千早振いつきの宮の旅ねにてあふひそ草の枕なりける　（千載 967　三句「旅ねには」）

29 浦風になひきにけりなさとのあまのたくもの煙心よはさは　（後拾遺 706）

30 うたゝねのこのよの夢のはかなさにさめぬやかての命とも哉　（後拾遺 564　三句「儚きに」）

大宰権帥経信

31 夕去は門田のいなはをとつれてあしのまろやに秋風そふく　（金葉 183）

32 奥津風ふきにけらしなすみよしの松のしつえをあらふしら波　（後拾遺 1064）

33 夕日さすあさちかはらの旅人はあはれいつくにやとをかるらん」5オ　（新古今 951）

34 たひねするあしのまろやのさむけれはつま木こりつむふねいそくなり　（新古今 927）

35 山ふかみ杉のむらたちみえぬまておのへのかせにはなのちるかな　（新古今 122）

俊頼朝臣

36 故郷はちるもみち葉にうつもれて軒のしのふに秋かせそふく　（新古今 533）

37 まつかせのをとさへ秋はさひしきにころもうつなりたまかはのさと　（千載 339）

38 とをちには夕たちすらし久堅のあまのかくやま雲かくれゆく　（新古今 206）

39 うつらなくまのゝいり江のはまかせにおはなゝみよる秋の夕暮　（金葉 254）

40 行すゑもおもへはかなし津のくにのなからの橋も名は残りけり　（千載 1027）

後鳥羽院

41 おほえすよいつれの秋のゆふへよりつゆをく袖とそての成けむ　」5ウ　（続古今 362〔御集〕）

42 みすしらす昔の人のこひしきは此世をなけくあまり成けり　（〔続千載 1969〕〔御集〕）

43 人もおしひともうらめしあちきなくよをおもふゆへ。身をおもふ身は　（続後撰 1199　五句「ものおもふ身は」）

44 山ひめの霞の袖やしほるらむはなこきたれて春雨そふる　（続古今 153〔御集〕）

45 みわたせは山もとかすむ水無瀬河ゆふへを秋となにおもひけむ　（新古今 36）

後京極摂政

46 空は猶霞もやらす風さえて雪気にくもる春のよの月　（新古今 23）

47 あまの戸をゝしあけかたの雲まより神代の月の影そのこれる　（新古今 1545）

48 さらしなの月やはわれをさそひこしたかすることそ宿のあはれは　（〔秋篠月清集〕）

49 はるはみなおなしさくらと成はてゝ雲こそなけれみよしのゝ山　（新勅撰 69）

50 いそのかみふるの神杉ふりぬれと色にはいてすつゆもしくれも　」6オ　（新古今 1028）

前権中納言定家

51 心からあくかれそめしはなの香に猶物おもふはるのあけほの　（〔続拾遺 980〕〔拾遺愚草〕）

52 いかにせんさらてうき世はなくさますたのみし月も涙おちけり　（千載 1001）

53 たひ人の袖ふきかへす秋風に夕日さひしき山のかけはし　（新古今 953）

54 かきりなくまたみぬ人のこひしきは昔やふかく契りをきけん

55 しくれつゝ袖たにほさぬ秋の日にさこ　（新勅撰 346）

そみむろの山はそむらめ

従二位家隆

56 かくはかりさためなきよに年ふりて身
さへしくるゝ神無月かな　（続古今 1629〔玉吟集〕）

57 おいぬれはことしはかりとおもひこし
又秋のよの月をみるかな　（新勅撰 1088）

58 いつもかくさひしき物か津のくにのあ
しやのさとの秋の夕暮　」6ウ　（続古今 361〔玉吟集〕）

59 いかにせん身はいやしくて年たかき人
をあはれとおもふよもかな　（続古今 1793〔玉吟集〕）

60 あり明のほのかにみえし月たにもをく
らぬ空にかへる秋かな　（〔新拾遺 556〕〔玉吟集〕）

僧正遍昭

61 秋山のあらしのこゑをきくときは木の
葉ならてもの物そかなしき　（拾遺 207）

62 いそのかみふるの山邊の桜はなうへけ
ん時をしる人そなき　（後撰 49）

63 わかやとはみちもなきまてあれにけり
つれなき人を待とせしまに　（古今 770）

64 みな人ははなのころもに成ぬなり苔の
たもとよかはきたにせよ　（古今 847）

65 わひ人のわきてたちよる木のもとはた
のむかけなく紅葉ちりけり　（古今 292）

素性

66 今こんといひしはかりに長月の有明の
月をまちいてつるかな　」7オ　（古今 691）

67 秋かせの身にさむけれはつれもなき人
をそたのむくるゝ夜ことに　（古今 555）

68 山寺はいはゝいはなむたかさこのおの
へのさくらおりてかさゝむ　（後撰 50）

69 われのみやあはれとおもはむ蛍なく夕
かけのやまとなてしこ　（古今 244）

70 あきかせに山の木の葉のうつろへは人
の心もいかゝとそおもふ　（古今 714）

増基

71 ふゆのよにいく度はかりねさめして物
おもふやとのひましらむらん　（後拾遺 392）

72 ともすれはよもの山邊にあくかれし心
に身をもまかせつるかな　（後拾遺 1021）

73 神無月時雨はかりを身にそへてしらぬ
山ちにいるそかなしき　（後撰 454）

74 たかしまや松のこすゑにふく風を身に
　　（〔増基集〕）

75 しむときそ鹿もなくなる
あさな〳〵しかのしからむはきのえの
すゑ葉の露のありかたのよや　」7ウ
（詞花 352）

恵慶

76 やへむくらしけれるやとのさひしきに
人こそみえぬ秋はきにけり
（拾遺 140）

77 秋といへはちきりをきてやむすふらん
浅茅かはらの今朝の白露
（新古今 463）

78 松陰のいはゐの水をむすひあけて夏な
き年とおもひけるかな
（拾遺 131）

79 あまのはら空さへさえやわたるらんこ
ほるとみゆるふゆのよの月
（拾遺 242　四句「こほりとみゆる」）

80 わかやとのそともにたてるならの葉の
しけみにすゝむ夏はきにけり
（新古今 250）

道命

81 ふるさとのすみうかりしにあくかれて
いつちともなき旅をゆくかな
（〔新千載 785〕五句「旅の空かな」〔道命阿闍梨集〕）

82 かそふれはとしこそいたく老にけれよ
をへてみつる月のつもりに
（続古今 1751〔道命阿闍梨集〕）

83 いのちあらはきゝてん物を郭公しぬは
かりにもまつこゝろかな　」8オ
（〔道命阿闍梨集〕）

84 いつとなきをくらの山の陰をみてくれ
ぬと人のいそくなるかな
（新古今 1643）

85 今よりはこれそあるへきことなれと恋
しく人の成もゆくかな
（〔道命阿闍梨集〕）

能因

86 ゆふされは塩かせこえてみちのくのの
たのたまかは千鳥なくなり
（新古今 643　二句「しほかせこして」）

87 あしひきの山した水にかけみれはまゆ
しろたへにわれおひにけり
（新古今 1708）

88 さらしなやをはすて山にたひねしてこ
よひの月をむかしみし哉
（新勅撰 282）

89 よの中よおもひすてゝし身なれとも心
よはしとはなにみえぬる
（後拾遺 117　五句「はなにみえける」）

90 山さとのはるの夕くれきてみれは入会
のかねに花そちりける
（新古今 116）

良暹

91 さひしさに宿をたちいてゝなかむれは
いつくもおなし秋のゆふ暮　」8ウ
（後拾遺 333）

92 たつねつるはなもわか身もおとろへて
後の春ともえこそちきらね
（新古今 153）

93 あまつかせ雲ふきはらふたかねにてい
（詞花 98）

るまてみつる秋の夜の月

94 今はとてねなまし物をしくれつる空ともみえすすめる月かな　（新古今 600）

95 夕暮は葛の葉かへしふく風に夏野ゝ草鹿もなきぬへき哉

大僧正行尊

96 もろともにあはれとおもへ山桜はなよりほかにしる人もなし　（金葉 556）

97 あはれとてはくゝみたてしいにしへはよをそむけともおもはさりけん　（新古今 1813）

98 かへりこんほとをはいつといひをかしさためなきよは人たのめなり　（千載 482）

99 草の庵をなに露けしとおもひけんもらぬ岩屋も袖はぬれけり　（金葉 568）

100 はるくれは袖のこほりもとけにけりもりくる月のやとるはかりに　（新古今 1439）

」9オ

西行

101 山さとは秋のすゑにそおもひしるかなしかりけり木からしの風　（新勅撰 338）

102 あはれとてなととふ人のなかるらむ物おもふやとの荻のうは風　（新古今 1307 二句「とふ人のなと」）

103 身のうさをおもひしらてやゝみなましそむくならいのなき世なりせは　（新古今 1829）

104 いまそしるおもひいてよと契しはわすれんとてのなさけ成けり　（新古今 1298）

105 をしなへてはなさかりに成にけり山のはことにかゝるしら雲　（千載 69 二句「はなはさかりに」）

俊恵

106 待しよりかねておもひし春ことのけふにも花のなりにける哉　（〔新後拾遺 116〕三句「散ことの」〔林葉和歌集〕）

107 なかむれはのこりの春をかそふれは花とゝもにもちる涙かな　（新古今 142）

108 難波かた塩干にあさるあしたつも月かたふけはこゑうらむや　（新古今 1553 五句「こゑのうらむる」）

」9ウ

109 かすならて年へぬる身は今さらによをうしとたにおもはさりけり　（千載 1076）

110 月をこそあはれとよひになかめつれくもる時雨も心すみけり　（〔林葉和歌集〕）

寂蓮

111 涙川身もうきぬへきねさめかなはかなきゆめの名残はかりに　（新古今 1385）

112 そむきても猶うき物は世なりけり身を　（新古今 1750）

113 はなれたる心ならねは
なそもかくちゝにうれへのあまるまて　（続後撰 1106）

114 月をあはれとおもひそめけん
降そむるけさたに人のまたれつる深山　（新古今 663）

115 のさとの雪の夕くれ
かつらきやたかまのさくら咲にけり龍　（新古今 87）

116 田のおくにかゝるしら雲
慈鎮大僧正
わかたのむ神もや袖をぬらすらんはか　（新勅撰 561）

117 なくおつる人のなみたに　」10オ
ちりちらす人もたつねぬ故郷の露けき　（新古今 95）

118 はなに春風そふく
たれとなく心に人のまたるゝやなかむ　（続古今 416〔拾玉集〕）

119 る月のさそふなるらん
庭の雪にわか跡つけていてつるをとは　（新古今 679）

120 れにけりと人やみるらん
芳野山なをしもおくに花さかは又あく　（新勅撰 1053）

121 かるゝ身とや成なむ
小野小町
うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人　（古今 656）

122 めをもるとみるかわひしき
はなの色はうつりにけりないたつらに　（古今 113）

123 わか身よにふるなかめせしまに
あきの月いかなる物そわか心なにとも　（新勅撰 283）

124 なきにいねかてにする
あまのすむ浦こくふねのかちをなみよ　（後撰 1091）

125 をうみわたる我そかなしき
うたゝねにこひしき人をみてしより夢　（古今 553）

126 てふものはたのみそめてき　」10ウ
伊勢
待人の見えぬからにやさ夜ふけて月の　（〔玉葉 1401〕〔中務集〕）

127 いまにもねはなかるらん
難波なるなからのはしもつくる也今は　（古今 1051）

128 わか身をなにゝたとへん
わかれてはいつあひみんとおもふらむ　（後撰 1320）

129 かきりある世の命ともなし
さもこそはあひみんことのかたからめ　（拾遺 951）

130 わすれすとたにいふ人のなき
みわの山いかにまちみむ年ふともたつ　（古今 780）

131 ぬる人もあらしとおもへは
齋宮女御
ぬるゆめにうつゝのうさもわすられて　（新古今 1383）

おもひなくさむ程そはかなき

132 みかきもる衛士のたえたるわれなれや
たくひ又なき物おもふらん　（〔斎宮女御集〕）

133 なかめする空にはあらてしくるゝや袖
のうちにや秋をしるらん　」11オ　（〔斎宮女御集〕）

134 おもへとも猶そあやしきあふことのな
かりし昔なになけきけん　（〔玉葉 1456 村上天皇〕五句「なに思ひけん」〔斎宮女御集〕）

万葉代天暦御記作云々後日取〻勘出之

135 ねられぬは夢にもみえすはるのよをあ
かしかねつる身こそつらけれ　（続古今 1210 村上天皇〔斎宮女御集〕）

中務

136 ありしたにうかりし物をあかすとてい
つくにそふるつらさなるらん　（後撰 953 三句「あはすとて」）

137 うつゝとも夢ともなくてあけぬるをい
つれの世にか又はあひみん　（〔中務集〕）

138 わすられてしはしまとろむほともかな
いつかは君を夢ならてみむ　（拾遺 1312）

139 さやかにもみるへき月をわれはたゝな
みたにくもるおりそおほかる　（拾遺 788）

140 うへてみる草葉そよをはしらせけるを
きてはきゆるけさの朝露　（拾遺 500）

馬内侍

141 ねさめしてたれかきくらむ此ころの木
の葉にかゝるよはのしくれを　」11ウ　（千載 401）

142 しかすかにかなしき物は世中をうきた
つほとのこゝろなりけり　（後拾遺 1022）

143 かきくもれしくるとならは神無月けし
き空なる人やとまると　（後拾遺 939 四句「心空なる」）

144 つらからはこひしきことのわすれなて
そへてはなとかしつ心なき　（新古今 1395 二句「こひしきことは」）

145 とゝまらぬ心そみえんかへるかりはな
のさかりを人にかたるな　（新拾遺 70）

和泉式部

146 物をのみおもひしほとにはかなくてあ
さちかすゑによは成にけり　（後拾遺 1008）

147 命あらはいかさまにせんよをしらぬ虫
たに秋はなきにこそなけ　（千載 1092）

148 よのなかに猶もふるかなしくれつゝ雲
まの月のいてやとおもへと　（新古今 583）

149 あらさらむ此よのほかのおもひてに今
ひとたひのあふこともかな　（後拾遺 763）

150 みな人のかさしにすめるその草の名は
（〔和泉式部集〕）

なにとかやいひてきかせよ　」12オ

赤染衛門

151 うらむともいまはみえしとおもふこそ
せめてつらさのあまり成けれ　（後拾遺 710）

152 見てもかつあはれなるかな桜花はるには
は又やあはしとすらん　（〔赤染衛門集〕）

153 神無月有明の空のしくるゝを又われな
らぬ人やみるらん　（詞花 323）

154 いかにしてみえしなるらんうたゝねの
夢よりのちは物をこそおもへ　（新古今 1379 初句「いかにねて」）

155 やすらはてねなましものをさよふけて
かたふくまでの月をみしかな　（後拾遺 680）

紫式部

156 ふれはかつうさのみふさるよをしらて
あれたる庭に積る初雪　（新古今 661）

157 なきよはるまかきの虫もとめかたき秋
のわかれやかなしかるらん　（千載 478）

158 神代にはありもやしけんさくら花けふ
のかさしにおれるためしは　」12ウ　（新古今 1483）

159 御芳野ははるのけしきにかすめともむ
すほゝれたる雪の下草　（後拾遺 10）

160 くれぬまの身をはおもはて人のよのあ
はれをしるそかつははかなき　（新古今 856）

相模

161 たのむるをたのむへきにはあらねとも
まつとはなくてまたれもやせん　（後拾遺 678）

162 うたゝねにはかなくさめし夢をたにこ
のよに又もみてやゝみなん　（千載 902 四句「このよに又は」）

163 おもふにもかなはぬよとはしりなから
猶なけかるゝ身をいかにせん　（〔相模集〕）

164 やくとのみ枕のしたにしほたれて煙た
えせぬとこのうらかな　（後拾遺 814）

165 いつくにかおもふことをもしのふへき
くまなくみゆる秋のよの月　（続後撰 357）

大貳三位

166 うたかひし命はかりはありなから契り
し中のたえぬへきかな　」13オ　（千載 908）

167 はるかなるもろこしまてもゆく物は秋
のねさめの心なりけり　（千載 301）

168 いとゝしく春の心の空なるに又はなの
香を身にそしめつる　（新勅撰 44）

169 秋風はふきむすへともしら露のみたれ
　（新古今 310）

てをかぬ草の葉そなき

170 ありま山ゐなのさゝはら風ふけはいて　（後拾遺 709）
そよ人をわすれやはする

五辻齋院

171 秋といへは物をそおもふ山の端にいさ　（新勅撰 221）
よふ雲の夕暮の空

172 なかむれはころも手すゝし久かたのあ　（新古今 321）
まの河原の秋の夕くれ

173 きりの葉もふみわけかたく成にけりか　（新古今 534）
ならす人をまつとなけれと

174 はかなくてすきにしかたをかそふれは　（新古今 101）
花に物おもふ春そへにける

175 あかつきの夕つけ鳥そあはれなるなか　（新古今 1810）
きねふりをおもふ枕に　」13ウ

殷冨門院大輔

176 世中のうきにつけてもなかむれは月を　（（続千載 471））
かこつに成ぬへきかな

177 なにかいとふよもなからへしさのみや　（新古今 1228）
はうきにたへたる命なるへき

178 今はとて見さらん秋の空までもおもふ　（新勅撰 1092　四句
はかなし夜はの月影　「おもへはかなし」）

179 かさゝきのよりはのはしをよそなから　（新勅撰 209）
まちわたる夜に成ぬへきかな

180 はなも又わかれんはるはおもひいてよ　（新古今 143）
さきちるたひの心つくしを

」14オ

本云
正元二年極月除夜於燈本以或好士
本染老筆寫秀歌今春披覧之處
専除吳他之流者多漏無雙之名歌
唯是不異損金於山沈珠於渕撰者
縱雖述廉正之旨見者更不為耳同之
翫而已

吾嫡旅客

」14ウ

（下段、勅撰集は国歌大観（旧版）による。
私歌集は私歌集大成による。）

書誌

一　写本　一冊。

一　所蔵　岡崎市祐金町、専福寺。

一　蔵書印　なし。
一　大きさ　縦 25.0×横 18.0 cm。
一　綴じ方　列帖装。
一　表紙　金銀ちらし霞模様鳥の子。
一　題簽　表紙左上に金ちらし紙に「三諦四九撰」とある。
一　丁数　十五丁、墨付十三丁。
一　行数　一面十行、歌人名、歌一首をそれぞれ一行をとって書く。
一　内・尾題　なし。
一　目録　第二丁ォから三丁ゥまで、二段に俗・僧・女として歌人名を記す。目録題「三諦四九撰」。
一　書写者　箱書によれば園基音。紙質等からみても、基音の没した明暦元（一六五五）年前後の頃のものと思われるので、書写者も園基音でよろしいかと思われる。
一　箱書　26.5×20.0 cm の桐箱のふた中央にうちつけに「三諦四九撰」とあり、その右下に「筆者園増左大臣基音公」とある。

本書の成立は、奥書によれば正元二（一二六〇）年以前である。今、その成立年次を考える手がかりとして、本書所収歌百八十首と勅撰集収載歌との関係をみると次のようである。

1　古今和歌集　関係歌人八　十八首
2　後撰和歌集　初出歌人（含増基）三　九首
3　拾遺和歌集　初出歌人六　十七首
4　後拾遺和歌集　初出歌人八　十八首
5　金葉和歌集　初出歌人二　四首
6　詞花和歌集　初出歌人二　三首
7　千載和歌集　初出歌人七　十五首
8　新古今和歌集　初出歌人一　四十九首
9　新勅撰和歌集　十三首
10　続後撰和歌集　四首
11　続古今和歌集　十首
12　続拾遺和歌集　一首
14　玉葉和歌集　二首
15　続千載和歌集　三首
18　新千載和歌集　一首
19　新拾遺和歌集　一首
20　新後拾遺和歌集　一首
勅撰集未載歌　十三首
（ただし、古今と拾遺、後撰と拾遺に重出する歌二首がある）

これをみると、正元元（一二五九）年後嵯峨院の下命、文永二（一二六五）年奏覧の「続古今和歌集」を一つの境として、それ以後の勅撰集収載歌は少なくなっている。作者が「新古今和歌集」初出の後鳥羽院（一二三九年崩）を下限とする点をあわせて考えると、本書奥書の正元二年からあまり遡らない時期に成ったものと考えられよう。

そもそも本書の題である「三諦四九撰」が何か特別な意味を含む命題であるのかどうか。後鳥羽院の給題によって建仁二（一二〇二）年に催された歌会の三体、すなわち「高歌」「痩歌」「艶歌」による詠歌の弁別が、本書に採られているとは思えないし、天台宗で説くところの空・仮・中の三諦を示しているようでもない。単に俗・僧・女の三躰を示すものと思われる。いわゆる三十六歌仙、後六六撰、新三十六人撰などの三十六人の撰集を、俗・僧・女の三つにわけ、各十二名、一人五首づつの秀歌撰として編んだものである。

三十六歌仙は人麿、業平、僧正遍昭、小野小町、紀貫之、壬生忠岑、素性、伊勢、斎宮女御、中務、の十名、後六六撰歌人は、道信、実方、僧基、恵慶、道命、能因、馬内侍、和泉式部、赤染衛門、紫式部、相模の十一人、新三十六人撰歌人は良経、定家、家隆、慈円、式子内親王、の五人である。その他に、中古六歌仙や新六歌仙をみると、俊頼、俊恵、西行などが入るが、経信、良暹、行尊、寂蓮、大弐三位、殷富門院大輔といったいずれにも含まれない歌人もいる。俗・僧・女を同数ずつ集めたため、僧は、広く、俗は狭く撰定しなければならなかったと思われるが、俗に六条藤家の歌人が全く含まれず、俊成もはずされているのに、六条源家の三代全てが含まれているのは、奥書に「専除異他之流作」として、撰者が撰者にあたって自らの流と異なる歌人達を除外したとしているのと呼応しているとも思われる。さきに挙げた勅撰集との関係でも、二条為家の撰進した「続後撰和歌集」所載歌が四首しかなく、為家の外に基家、家良、行家、真観の加わった「続古今和歌集」所載歌が十首あるのは、そのあたりの事情を示しているのではないだろうか。

本書所収歌のうち、続古今和歌集以下の勅撰集の入集歌と、未載歌のうちで、全く私歌集等に含まれていないもの（5・15・18・95・176）がある。これらの歌が何に拠って本書に入れられたのか、また、斎宮女御の134・135が村上天皇の歌であるように、作者は必ずしも正しくない、これも何に拠ったのかは、不明である。

Ⅱ　古今和歌集・伊勢物語難義注

書誌

一　写本　一冊。
一　所蔵　岡崎市祐金町、専福寺。
一　蔵書印　なし。
一　大きさ　縦 22.0×横 15.0 cm
一　綴じ方　列帖装。
一　表紙　金泥絵紺紙（後補）。
一　外題　なし。
一　丁数　七帖、現存九十五丁、第一帖の最初二丁と最終一丁が欠落しているものと思われる。各帖七葉十四丁。

「古今和歌集」は、第一帖～第六帖。欠落部分は目録あるいは序

の注と、巻第三の152番歌の注の後半から160番歌までである。

「伊勢物語難義注」は第七帖。

一　行数、「古今和歌集」一面十～十一行、一行二十字前後。

「伊勢物語難義注」一面九～十二行、一行十八字前後。

一　内題　各巻頭に、「古今和謌集　第弐」等とする。

「伊勢物語難義注」は内表紙がある（翻刻参照）が内題は「伊勢物語難義注」

一　目録　「古今和歌集」現存せず。「伊勢物語難義注」なし。

一　奥書　「古今和歌集」第六帖の第十二丁ウ。于時正中二年九月廿四日於綾小路西洞院沙門範空／書写之〔為中風間□筆見也春秋廿一歳云〻〕

同じく第六帖の第十四丁ウ。

朱〔正中二年乙丑九月廿五日己巳点之了同日一校了〕

後見仁之法累之群数自他為廻向念佛十反帰志無量寿覚／時也正仲第二之暦窮秡三七之候於綾小路西洞院桑門範空／書写之了此本者（朱訂四六）自身雖不口傳一流之師資不違相傳／然之間写之了雖為悪筆不顧恥漸窮秡三七之天始之／同月四六之日己巳書之了同日一交之了範空仏子（二十一歳）／後見人之相構〻〻深於懐中秘中秘也努力〻〻／不及外見一流之相傳也他流之人見者又可謗之其仰者／悲外早當世人者為逐崛故歟誹謗之衆者勝□悪五／逆弘法大師尺見タリ努力〻〻外見無益穴賢〻〻

とある。前者の「為中風」以下は、墨色も違い、あるいは別人の手かとも思われる。

「伊勢物語難義注」なし。

一　筆跡　「古今和歌集」は奥書に一校了とあるように、朱筆で濁点、合点と朱の書き入れがある。他にあきらかに後筆と思われる稚拙な書き込みと、範空の手になると思われる片仮名書きの私見の書き入れがある。

「伊勢物語難義注」は、「同時代の女房の次第」に後筆の書き込みが集中する。

イ　本書は、「古今和歌集」の抜粋注釈書である。書写者範空は、歌人としては、わずかに「新拾遺和歌集」巻第十八雑歌上に、

題しらず　　範空上人

一七一八　いとと猶ゆきゝも絶えて世をいとふ山のかひある庭のしら雪

の一首を残すのみである。殆ど同じ時代に、浄土宗黒谷の光明寺の第七世に範空なる人物が存していた事は知られるが、同一人であるかどうかは定められない。

古今集の中世注釈については、昨今、研究が進められてはいるが、おそらく亜流に過ぎないと思われる本書の内容は、全文の翻刻を要するとは思えない。本書の形態を示す為に、三鳥についての注釈部分を挙げると、

28　／もゝちとりさへづるはるはものごとに　あらたまれども・われぞふ

りゆく

もゝちとりは・うくひす也・百千鳥(はくせん)とも・からくにには申也・此にをらせて・もゝちどりと・いふ也

春は・ものごとに・あたらしく・なれども・身は・ふり行と・いふ心をよめり モ、千鳥トハ春タチ□ウラ、カナルニモロ〳〵ノトリノヤハラキナク□也万葉ニハモ、チトリトモヨミ又エノミモリハムモ、チトリハナケト、モヨメリヨロツノトリノアマタノトリヲヨムト心ウヘシ

此哥甚俊本云サルマロマウチキミ

をちこちのたつきも・しらぬやまなかに

とはたつきも・しらぬとは・たよりも・しらぬ也

遠近(をちこち)とかけり・をちとは・ほか也・こちとは・こゝなり

よふこどりとは・さま〳〵に・傳とも・はこどりの事也

新古今西哥云フルハタノソハノタツキニキルハトノトモヨフコエノスコキユフクレ此ノタツキハ穴木也タツキトハタツキナキコトヲ云也万葉ニハ便トカキテタツキトヨメリ

208 29

〳〵わがゝどにいなおふせどりのなくなへに・けさふくかせに雁(かり)はきにけり　是は庭(にハ)・たゝき・と云鳥なり・〳〵とつぎをしへとりと云これ也イシクナキ也

〔読点・濁点及び（　）に入れない平仮名の読みは朱書、（　）に入れた平仮名の読みは筆写と同じ墨と思われる。〕

とある。本書の歌の配列は、「国歌大観本」と比すと、巻第十の450と451、456と460、巻第十三の637と638、巻第十五の785と787が逆転している。巻第十四の739番歌のかわりに、異本所載歌、

まなつるのあしけのこまやなかぬしの我か前ゆかはあゆみとゝまれ

が入れられている。

ロ　本書の最も特徴的な点は第七帖目に「伊勢物語難義注」が合綴されているところにある。第六帖の十二丁ウの最初に識された奥書に続けて、十三丁ウから十四丁ウ一行目までに、万葉集と古今集から続千載集までの勅撰集の集名と、歌数、下命者、撰者が記され、さらに二行目に金玉集、六帖と私撰集が記され、次の行からは二つめの奥書となっている。一方「伊勢物語難義注」の方には内表紙に、新撰随脳、和歌論義、諸国歌枕、深窓秘集、朗詠和歌集、和歌九品、和歌十五番、新朗詠、新三十六人、知顕抄、続詞花集、牧笛記、奥義抄、一字抄、初学抄、類聚題林抄、袋造(ママ)紙、五葉集、後十五番、難後拾、歌苑抄、伊勢物語、大和物語、童蒙抄といった私撰集、歌論書が、表紙の題目以外の殆どを埋めて書かれている。その筆跡は一部の書き込みを除いて範空のものと思われる。範空によって「古今和歌集」注と「難義注」が合綴され、その余白部分に右に挙げたような歌書類の題が記されていったか、最初から、「古今和歌集」注の後ろの余白に内表紙を新に書いて「難義注」を書いたものかと思われる。しかし、現在離れている最終丁のオモテとその前の第十三丁のウラとが最もよく変色しているので、合綴された後、案外早い時期に「古今和歌集」と「難義注」とにわけられ、その時とれた「難義注」の最終丁を上に載せて置かれていたのかと思われる。筆者が本書を見た時には、最終丁は「難義注」内表紙の前にゼムクリップでとめら

れていた。

片桐洋一氏が『伊勢物語の研究〔資料篇〕』（昭和五十年十月・明治書院）に翻刻された「伊勢物語難義注」と比するに少しく内容が異なっている。氏が解題に示された鉄心斎文庫本と項目数は一致する。氏は鉄心斎文庫本を、「室町時代の、おそらくは永享・文明頃の書写としてよかろう。」とされているが、本書は正中をあまり下らない時期の書写と思われる。ただし、鉄心斎文庫本とは、「同時代の人〳〵の事」と「同時代の女房の次第」の位置が異なり、桃園文庫本の二十項目までと同じ配列になっている。

項目を挙げておくと、

一　業平の氏文の次第
一　同時代の人〳〵の事
一　同時代の女房の次第
一　伊勢物語といふ事
一　五節中将と云事
一　うひかふりといふ事
一　かいまむといふ事
一　なかめくらしつと云事
一　むめらのやとゝ云事
一　ひしき物といふ事
一　とふほたるといふ事
一　あくた河といふ事
一　をにひとくちにくいてけりと云事
一　つけのくしと云事
一　ぬきすといふ事
一　あつさ弓と云事
一　月やあらぬといふ事
一　つゝいつと云事
一　風ふけはと云事
一　たのむのかりといふ事

本文翻刻

表紙

二位宮内卿傳流也

伊勢物語難義注

沙門範空法師也

本文

伊勢物語難義注（惡義也　東国之習家ヲタタカケト云家鶏也）

一業平の氏文の次才

昔業平は平成天王の才四の皇子阿保親王の才五の子也　桓武天王の才八の娘伊豆の内親王の子也又かつらの内親王ともいふなり　天長貳年乙巳はしめて生す淳和天王の御時七歳にて童殿上して深草の御門」1ウの御

時みかさ山の臨時の祭のつかひをうけ給はるかるかゆゑに大内よりれうの御すかたにていてしときすきひたひのかふりを給はる又五郎の伶人たちしゆゑにしのふすりのをみの衣をきたりしなり承和拾肆季に内の蔵人にふして初在原の姓を給るかるかゆゑに在中将とはいふ也又貞観貳年右馬頭に任して交野の御狩に供奉せりき」2オ惟高のみこの御時也同七年に北祭の使を承　故に近衛の中将とはいふ也せり河の行幸の時哥の御感によりて仁和の中将ともいふ也陽成院の御即位の初まて八十余にて亡早ぬ彼墓大和國ふるの郡在原寺と云は是なり

一同時代の人〳〵の事

なからの中納言のちにはひはの大臣冬継の大臣ちやくなん

よしふさの大政大臣しら河とのと申ちうしんこうのこれ也　」2ウ

よしすけの左大臣冬継の三男相應和尚の父　基經大政大臣堀河政申二条后のせうと

國經大納言基經をとゝ　四条大納言ふしみの大納言これなり

行平中納言業平兄ちうなこん　さうをう和尚

智證大師　大納言紀の有常

遍照僧正俗名は姪峨少将普峯宗定やすきのきやうのこ　慶尊法印行平子也

小僧都菅性遍照の別宿遍照の子也　参義治卿もろき遍照の弟也

源至　源希したかふか（又也）（をちなり）

これたかの親王文徳子也　」3オ

一同時代の女房の次第

（四）順子后冬継のむすめ仁明后　（五）高子の后文徳后（清和后）（長良卿の女）

（七）ますこ（恬カッイ本）文徳のむすめ　くんし内親王業平むすめないしんわう

（一）あこきのありつねのむすめ　（十二大和守継隠女伊勢といふ）

（十三）ほこうはらのさとのをんな也川のかみのむすめ

（十）幾こ四条大納言のむすめ

（中納言昇女めつらしのまへといふ）ますこ小町かむすめ

（三）小野小町仙羽郡司良家女むすめ

一伊勢物語といふ事

（八筑紫染河女これには名なし九中納言行平女清和更衣貞員親王母）

昔この物語を東宮の御所にてつくられける時ゆるされ色きたる女房のをとなしきかけをひかけたるいてきたりていみしく此物語つくらせ給物かな哥二首いるへきよしをいひけれはいつくよりたれ人のかくはの給ふそといゑは返事はなくて此哥をいひけり

神風や伊勢のはまをきをりはへて
たひねやすらんあらきはま遊に　」4オ

（六紀中納言長谷雄女遠紀の女といふ）

（二）明子の后そめとのゝきさき仁明公　文徳后）

よしこをなしきむすめ

ならここれたかのむすめ

ゑしの内親王さいぬんに（ゑ）

かこ（なりひらのいもうとなり　すはは（さなはり給ふ）（そ歟）うのかみ在原仲平やしな　い妹也）

さうこ伊勢のかみつきかけのむすめいせなり

三品女三宮

宜子たかやすのをんなすみよしのかんぬしのむすめ

うちこやすもちのしんわうのむすめ　」3ウ

おもふこといはてやたらにやみぬへき
われとひしき人もなけれは

かくいひてたちけるを袖をひかゑてとひけれは我は伊勢よりの御使なりといひてかきけつやうにうせにけりさては大神宮よりの御使と心えて伊勢物語となつけけるなり

一五郎中将と云事

むかしとよのあかりの節會の業平は伶人にてしのふすりのをみの衣をきてるりたんのまひをせし時五節のくしを」4ウおほくもちたりけるをとすを后御覧してつけさせ給へるなり五は五節の五也郎は櫛といふ文字のつくりなるゆゑに五郎とはいふ也くしといふ文字の木のなきは郎とよむなりさてこそくしをとしのへいしうとはいふなり伶人と舞人なり

一うひかふりといふ事

昔ふかくさの御門の御時かすかのりんしのまつりのつかひをなりひらうけ給はりて大内よりれうの御すかたにていてし時すきひたいのかふりを給はりし故に」5うゑかふりとはいふ也余の人國王よりかふり給はる事なし業平計はしめて給はるゆゑにうゑかふりと云也又もとより殿上して殿上にて元服せしかはうゑかふりとはいふなり

一かいまむといふ事

昔かすかのやしろにけんふつのありし時后たちさしきをうたせて御覧しけるときまめをとこいかきのはさまよりのそきてかひま見けりかきのまより見れはかいまむとは云也さてをとこ心もあくかれてきたりけるしのふすりのかりきぬ」5ウのすそをきりて此哥をかきて参けり

かすかのゝわかむらさきのすり衣
しのふのみたれかきりしられす

かくかきてこのみといふ童して参せけりこれをきさきたち御覧してあはれとやおほしけん御まゑにさふらひけるきのあこにおほせて御返事ありあこ

みちのくのしのふもちすりたれゆゑに
みたれそめにし我ならなくに

これをうちゝのといふはした物にてをくられけり此哥はかはらの大臣の哥とはいゑともよのきこゑみくるしとてかくは」6オいふなり后たちと申はめいこのきさきしゅんこのきさきこの后よしこならこますこさうこあこたちの事なり又かのまめをとこは其時のまつりのつかひにてありし也

一なかめくらしつと云事

昔西の京にめいこの后すみ給ひける時まめをとこしのふすりのひてかよひけるころはるさめひくらしのりていとつれ〳〵なるをりしも此哥を男よみて参せけり

をきもせすねもせてよをあかしては
はるの物とてなかめくらしつ」6ウ

この哥の心はよるもうちぬる事なけれはおきもせす又ねもせてよるを

あしてはたゝそなたのかたをのみなかめてたちくらしつといふ心なり
はるのものとてその時めいこの后は春宮のみやす所と申しかはとうく
うとはるの宮とかく故にはるの物とは云也
一むめらのやとゝ云事
恋するやとをはかくいふなりすへて物おもふやとをいふなるへし又あ
れたるやをもいふ事もありあれたるところにはかならすむくらといふ
くさのをうる」7オゆゑにかくいふなるへし
一ひしき物といふ事
これはふたつの義あり一には国王のやとらせ給ふ御枕のしたにはひし
き物とてをり物にしきなとをしかるゝならひにてあるやうに我ぬるに
は袖をこそひしき物にはすれといふ心也一にはひしき物と云事ありか
のひしき物云はうみのそこにをうるものなれはいつもぬれてのみある
といふ心也されは哥にも

おもひあらはむくらのやとにねもしなん
ひしき物には袖をしつゝも　」7ウ

一とふほたるといふ事
昔たかこのきさきくらひにそなわり給て人もふみもかよふへきところ
ならねはおもふなからかくしてすきけるころほたるのとふを見てをと
こ此哥を讃けり

飛ほたる雲のうゑまて行へくは
秋風たちぬかりにつけこせ

かくゆふ心は雲の上とは殿上をいふなり秋風たちぬとは人のこひしき
事いつもかはらねとあきかせふきぬれはいとはたさむく人のこひしき
事もまさりておほゆる也なか月のねさめにもしかのねむしのこゑ〳〵
」8オすたくにも木ゝのこのはのちりまかふを見ても秋はすゝろにあは
れまさるゆゑにあきの心とかきてはうれゑとよむ也かゝれは人もこと
恋しきとはいふなり
一あくた河といふ事
これはあまたの河ありといゑともまことには大極殿の中にみかはとい
ふかはをいふ也昔は大極殿に国王をはしましゝかはゝも河をうけて北
野よりほりをとしたりし河也千里やまあくた河とて内裏の中也むかし
たかこの后をまめをとこぬすみいてゝ月くまなきよかはを」8ウわたり
しに露を御覧してしらたまかなにそとゝひ給ひけるも此河の事なりと
ものみやすつこかあさきよめするとて花紅葉もちりあくたもはきあつ
めてなかすゆゑにあくた河とは云也されはある人はなにてうのいてな
かるゝを見てよめる

たりぬれはのちはあくたと成花を
おもふもしてまかふてう哉

一をにひとくちにくいてけりと云事
昔たかこの后をぬすみいてゝまめをとこ行ける夜雨あらくふりて神な
りして道もくらく」9オ行末もおほえさりけれは道のへのふる御堂にと
ゝまりてをくには女をゝきて男くちにたてりけれとも夜女ををに一口

にくいてけりいたやとさけめとん神なりにきこゑすなりにけり夜やう〳〵あけ行は女を見るになかりけり男あしすりをしてなけともかひなしさてたゝひとりかゑるとてこの哥をよみける

白玉か何そと人のとひしとき
露とこたえてきえなまし物を

かく云事はまことのをにゝはあらす后の御せうともとつねの大政大臣くにつねの大納言たちのよのきこゑみくるしとてうはひとゝめられける事をゝとは云なり道の邊の御堂とは朱雀」9ウ門を云なりかの門にてうはいとゝめられけるなり此門には昔はまことのをにもすみけり紀納言は此門桜にて鬼と雙六をうち都のよしかはきはれてはとひいしけれは鬼もんのうゑより氷とけては涙とつけたりしも此門の事也

一つけのをくしと云事

これは二のきありひとつはとよのあかりのせちゑの時五節のまひゝめとてみめよき若女房を傾城となつけてわらはけさんのよ内裏ゑまいるなり其時かみにくしをさしてまいるをつけのをくしといふもんあり又礒部のあまのかつきする時もしをやくにもひるのかれいをうけに入てこしに」10オつけたるを云ともみゑたりされはうたにも

葦のやのなたの塩やくいとまなみ
つけのをくしもさゝてきにける

一ぬきすといふ事

昔めいこの后たらひの水に御かけのうつろい給ふを見て此歌をよみ給へるなり

我はかり物おもふ人はまたもあらしと
思へは水のしたにもありけり

此哥は業平を恋給ひてあそはしけるなりはゝききてはらたちてぬきすをすてゝたちにけりといふ也ぬきすとは后のかねつけてあらひ給ふとき手洗に敷すをいふなり水をちらさしれう也后のほかたの人これをしくことなしをりしもまめをとこたち聞てかく[は]」10ウ[よ]みける

みなくちに我や見ゆらん河つさゑ
水のしたにてもろこゑになく

一あつさ弓と云事

昔をとこゐ中わたらひゑ行とてをんなにいふやうもし我みとせまてかゑりこすはにゐまくらせよといひをきていにけりすてにみとせまてこさりけれは今夜にゐ枕せんとしける夜をとこかゑりきてかとをたゝくに女うちより此哥をいはせけり

あらたまのとしの三年をまちわひて
たゝ今夜こそにゐ枕すれ

これを男きゝて内へもいらすして門よりすくるとて此返事によみけり

あつさ弓まゆみつき弓としをへて
わかせしかことうるはしみせよ」11オ

かくいふ心は三のゆみは三はるといふなりみはるは三とせ也たとゑはゆみは女也つるはをとこ也今のにゐ枕のをとこつるのやうにひかは女

ゆみのやうにたをやかにしたかひよれといふ心也我せしかことは我に
あたりしやうに今のにゐ枕のをとこにもあたれと云也女これをきゝて
あつさ弓ひけとひかねとむかしより
君に心はよりにし物を
とよみてとゝめけれとん(ママ)とゝまらていにけりにゐ枕の男これたかのし
んわうなり女はあこ也
一月やあらぬといふ事
昔たかこの后くらひにそなはり給てのち東五条の西のたいにて去年(こそ)の
今夜(こよひ)あいし事を思ひ」11ウいてゝをとこかの所に行て夜もすからそのあ
とをしのひつゝこの哥をよみてたゝひとりかゑりける事なり
月やあらぬ春やむかしの春ならぬ
我身ひとつはもとの身にして
此哥の心は月も去年の月春も去年の春なから我身はかりはかの人にあ
はねはかはりにけるといふこゝろなり
一つゝいつと云事
むかしやまとの国にすむ人ありけりとなりのいゑのまゑにつゝ井あり
けりかの井のほとりにとなりの家のをさなき物いてあひてあそひける
程に此をさなき物ともたかひにをとなしくなるほとにはちかはして見
ゑすなりにけりさてあやのあはする」12オ男をもせすしてすきけるかを(と)
このかたよりかくよみてやりけり
つゝいつやいつゝにかけし丸かたけ
をいにけらしないも見さるまに
かくいひてやりけれは女もうれしとや思けんやかて返事しけり
くらへこしふりわけかみもかたすきぬ
君ならすしてたれかわくへき
さて日数へすしてついにあいにけりたかいにあさからすちきりてすみ
ける程にをやもみなはかなくなりてたつきもなくすきわひて女にいひ
あはせてをとこ又かよふところたつねて行けり此女はやすもちの親王
のむすめ也」12ウ[な]りひ[ら]かいとこ也をや□□[兄][弟]な□□□□
□のきならへてすみけるなり
一風ふけはと云事
昔大和国より河内のたかやすゑをとこかよふとてたつたこゑをこゑけ
りかの大和の女男のたかやすゑ行けるをよろこひていたしたてけれは
をとこあやしみてことふるまいするにとてせんさいの中にかくれいて
みけれは月のくまなきに女はしちかくいてゝ琴うちひきてをとこのよ
はにひとり行覧といひて
風ふけはをきつ白波たつた山
よはにや君かひとりこゆらん」13オ
此哥の心は白波とはぬす人をいふ也しらなみといはんとてをきつつと
はいふなりかくぬす人のすむ山をよはに獨(ひとり)こゆらんとをとこをあはれ
む心をよむなり此をんなはつゝいつの女也たかやすの女は住吉の神主

のむすめ也

一たのむのかりといふ事

かりかねは夜はいそへにいてゝみきはにはむひるは腰路へかへるなら

ひにてむさしのをとをるとてむさしのゝ中にいるまのこほりみよしの

ゝさとゝてたの□□□□□□□□□のをり〳〵馬を□□□□□□の□

もに□ふ□□□□□□□」13ウ

こをおもふ涙のむめにかさを

きて心のやみにうとふやすかた

」14オ

（第十四丁オの三行目から十四丁ウ一面に伊勢に登場する人々の名かとおもわれる人名が書かれ、以上百三十二人とされているが、判読できない部分も多いし、直接難義注と関係があるとも思われないので省略する）

追　記

本稿は昭和五五・五六・五七年度の日本私学振興財団の学術研究振興資金に係る本研究所の「真宗を中心とした東海地方寺院資料の調査整理並びにその研究」の一部である。

また、本稿を作すにあたって、所蔵の専福寺御住職本多郁雄師から、二本の借覧など多大の御高配を賜った。厚く謝し申し上げる。